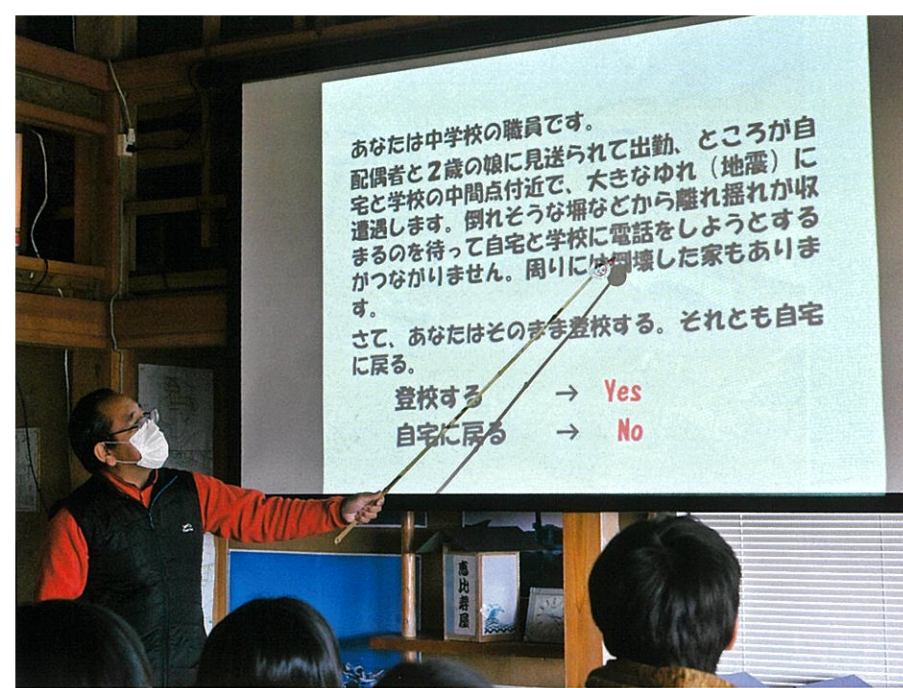


# コミュニティによる復興

岩手県陸前高田市 一般社団法人長洞元気村

ながほら





2011年3月11日に東日本を襲った大震災から11年になろうとしている。1万5千人以上が亡くなり、昨年3月時点でまだ行方不明者が2500人以上いる。そんな未曾有の大震災があった東北について考えるため、陸前高田市に赴く。街を歩くと、復興が終わっていない現実がそこにある。いまだ土地のかさ上げ作業が続いており、更地になつていく場所が多く残っているからだ。その中で、震災後の困難をコミュニティで乗り越えている岩手県陸前高田市広田町の一般社団法人長洞元気村を訪ねた。

長洞元気村は、岩手県陸前高田市の広田半島で海に面している長洞地区にある。多くが半農半漁で暮らす長洞地区には、震災前は60世帯が住んでいた。しかし、3月11日、28戸が津波に呑まれる。家を失った人々は集落の高台の民家に分宿し、地域コミュニティで彼らを支えることになった。だがその後、仮設住宅について行政から、津波の被害があった人々は別々の地域で住む必要がある、と聞かされた。

その方針に対して長洞の人々は、このままでは長洞のコミュニティを維持できないとの思いから、長洞地域の4人の地権者を説得し土地を無償で5年間借用。行政に対して、入居申込書（19世帯、26戸）をまとめて長洞集落の被災者のための仮設住宅建設要望書を提出。粘り強く交渉を続けた結果、2011年7月17日、長洞元気村（長洞地区仮設住宅団地）が誕生した。その後、2015年3月に仮設住宅は解体となり、自治会としての「長洞元気村」も解散したが、一般社団法人長洞元気村として現在も活動を続けている。

震災直後から、地域コミュニティとして災害に対応できたことについて、長洞元気村の代表である村上誠二さんは、

その背景に、震災前から地域の祭りを大切にしていたことがあると話してくれた。「長洞の祭りは、出来るだけ面白くやろうとみんなで工夫してやっていた」。それを裏付けるように、他の地域からお祭りに参加する人がいたとのこと。そして、祭りは最高の防災訓練でもあり、復興の過程においては、地域で災害を乗り越えるベースにもなったという。

長洞元気村の活動は長洞地域の未来を見据え、一人ひとりが豊かで幸せな生き方、働き方を継続し、地域全体が次世代で取り組む環境を創造していくことを目的として、高齢者が好齢者となる生きがいづくり、農業・漁業・防災体験による交流、地域の産物を利用した加工食品の製造販売活動を行っている。この日、加工食品の販売と防災ワークショップに参加した。

朝10時。陸前高田にある大型ショッピングセンターの近くで、ふくふく市という朝市が行われている。ここに不定期だが、長洞元気村として店を出している。この日、店に立つのは、長洞元気村のなでしこ会のAKB（A・明るい、K・かわいい、B・ばあちゃん）4人。ウニが入ったおにぎりや焼き魚、煮ダコなど近くでとれた海産物を加工し、販売している。そんな販売事業を行うようになったきっかけは、仮設住宅近くの集会所でやっていたお茶会だ。泣いてばかりではしょうがないので、菓子のゆべしをみんなで作るところから始まった。「売れることよりも、みんなでワイワイできることが一番大事」とおばあちゃん。商品を共に作り、客と話をしながら販売することで、ゆるやかなコミュニティが生まれている。

13時、静岡県教育委員会の方々と高校生が長洞元気村の防



災ワークショップを受けていた。代表の村上さんは、津波の被害を受けた自宅をそのまま震災の被害を伝える場所として活用。被災直後からの体験を語りながら、防災やコミュニティについて考える機会を作っている。

「町内会で集めた食料を町内会に入っていない人にも配りますか」。村上さんのこの問いに、高校生たちは頭を抱えながら考え、自分の意見を「Yes」か「No」のカードで表す。村上さんは当時の出来事を伝えながらも、そこには正解も不正解も無いこと、自分の意見を表現することが大事であることを語りかける。防災研究会という部活に所属する高校生は、「自分からこうしようという意識がないと、実際に災害が起きた時に、動くことができない。ここでの経験を自分の地域で生かしていきたい」と話してくれた。

震災から10年という節目に、元気村の中で変化があったという。それは、先に挙げたなでしこ会のAKB。このAは、去年までは「あきらめない」であった。「明るい」に変更したのは、なでしこ会のおばあちゃんから「『あきらめない』は卒業したい」との言葉からだったという。

震災と復興をコミュニティで乗り越えてきた長洞元気村。これからのコミュニティについて村上さんに何うと次のような話をしてくれた。「地元の人々だけでなく、よそ者、若者を含めて、この地域での生き方や暮らし方について共に考えていくこと。そんなコミュニティのあり方がこれから求められていくのではないか」。

この土地に生まれ、その土地の人々と共に生活を営み、祭りを行い、自然と共に生きる。生活が豊かになり、人付き合いを省き、自然から離れても生きていけると思うのは、まやかしだろう。この地でそんな歴史とした事実遭遇した。